

みぶ地方史

第126号
2025.4.1
三次地方史研究会発行

「戦時回覧板」を読む

— 地域史料から、戦争の歴史を学ぶ —

(その3)

中畑 和彦

はじめに

食は生きるための基本であるが、先の戦争中・戦後はその食糧事情が極めて深刻な時代であった。満州事変から日中戦争、太平洋戦争へと続いた「十五年戦争」の時代、さらに終戦直後の時期である。当時の食を取り巻く暮らしについて、三良坂町に残された、「戦時回覧板」の記事などを読みながら考えてみたい。

戦争中「どうして国民はそんなにまで逼迫した食糧危機に追い込まれたのか」その理由を、戦局の推移の中で明らかにすることが重要であると考ええる。それには他の生産物も含めて「生産から消費まで」、経済活動全体について考えていかなければならないだろう。その際、それを推し進めた国の政策や法制度、それを受けた県の施策などを明らかにしなければならぬと考える。当時の三良坂町や三次地方の人々の暮らしを中心に、残された「回覧板」(昭和二〇〜二十一年に出さ

・「戦時回覧板」を読む
— 地域史料から、戦争の歴史を学ぶ —
(その3) 中畑 和彦

・稲作農耕に伴う儀礼
〜 広島県三次市吉舎町丸田のカラス神〜 桑原 隆博

・「上田町の道標」文字の解読
面手 一義

・史料紹介
広島本藩済美録に見る
三次藩及び三次地方の出来事
立畑 春夫

れた二十数枚) を取り上げるとともに、背景については『広島県史・近代2』、『広島県戦災史』、『広島県双三郡三次市史料総覧第四篇』、『同・新聞資料篇』等の資料を通して考えてみたい。

一、当時の食糧事情を語る

『三良坂町誌』には明治時代以降の学校現場について生徒や教師の座談会が開かれ、そこで各自の思い出が語られている①。その中には戦中・戦後の食糧事情について次のようなものがあるので引用してみる。(△は教師、○は生徒の発言を示し、原文のままを記す) △本当に食糧事情の悪い時でした。昭和十八年頃のことですが学校では、お茶が不足するので、ふじを取りに行かせたり、また、バツタを取って、味噌汁へ入れて食べていました。

○学校の運動場はみんな畑になっていて、さつまいも等を植えたりしたものです。

△農家は食糧の供出を強制されていました。供出制度は戦前からあったのですが、特に苦しかったのは、敗戦前から戦後にかけての頃でした。

○あの頃は、木の葉を「飯に刻んで一緒に食べたり、しめ大豆のかすや、配給でもらったニシンの「一、二

本で食事をしていました。

○塩も不足して岩塩を配給してもらっていましたねえ。○麦の増産などで農家へ草とりに行って、むすびをたくさん作って出していたことがありました。あの時のむすびのおいしかったことが、今でも忘れられません。ふだん、ろくな物を食べていないので、みんなよろこんで手伝いに行ったものです。……

これらの感想で、とりわけ傍線を施した部分について少しふれておきたい。

・ふじ(藤)はマメ科フジ属で、初夏に花が咲き「藤棚」が見事な鑑賞の場となる植物(ヤマフジ)のことであるが、ここでは花を完全に乾燥させ、茶の葉といっしょに飲んだということなのか?

・バツタやイナゴ、ユオロギ、カマキリなどの昆虫は、貴重なタンパク源として佃煮などにも加工されたりして食された。

・大豆のかすは、大豆油を搾ったあとの粕のことで、ニシン(鰯、鮭)は、内臓や頭を取り除いて乾燥させた干物の「身欠きニシン」であったのだろう。

・塩は人体にとって健康を維持するために重要な物で、主に調味料として摂取されてきた。戦中・戦後、砂糖とともに塩は工業用、食用とも不足していた。岩塩は牛の餌としても用いられたが、日本では産出されなかったもので満州など外地から輸入されていたと考えられる。

言うまでもなくここに語られた証言は、困難な時代を生きた人々の実感のこもったものである。ただこれらはその一部であり、これ以外にも食に関して多くの